

研究分野のキーワード：イスラーム、ファトワー、ジェンダー論、中東地域研究、文化人類学

## 研究紹介

イスラームは世界の主要な宗教のなかで、日本人に最も馴染みがないと言えるでしょう。テロ、原理主義、女性差別…日本人のイスラーム認識はこのような単語に彩られています。

しかしイスラームがテロを称揚する、女性差別の宗教なのだとしたら、なぜイスラームはこれ程までに広がったのでしょうか。女性信徒がいるのはなぜでしょう。「保守的」で「原理主義的」なだけの宗教が、世界三大宗教のひとつであるわけではない。日本のイスラーム認識はどこか間違っているのではないか。女性信徒は「女性差別の宗教」といわれるイスラームをどうやって信仰し、生きているのだろうか。その生の姿を知りたい。生の声が聞きたい。

その思いから、私の研究はスタートしました。

日本で流通するイスラームに関する言説は、残念ながらオリエンタリズムと無縁ではありません。オリエンタリズムとは、ヨーロッパ（西洋）がオリエント（東洋）を自己と正反対の他者として措定し、これに後進性・不変性・受動性・奇矯性・非合理性といった負の表象を割り当ててきた歴史とその思想傾向のことです。フィルターにかけられた情報からは、ムスリムの倫理も感覚も願いも日常も、伝わってはきません。

預言者聖誕祭には子供たちや恋人に人形を贈り、ラマダン（断食月）の夕食に親族が集まり、ラマダン明けの祭りのために洋服を新調する。彼らの暮らしは季節ごとの行事に彩られていました。そのなかにイスラームがいかに自然に溶け込んでいることか。カイロの下町での住み込み調査は、理解できない行動に目を白黒させる日々でした。礼拝の仕方を習い、クルアーンを暗唱し、断食をし…。イスラームに興味を示す異教徒を、彼らは暖かく受け入れてくれました。

現在はエジプトでのフィールドワークで得た資料と、イスラーム法の専門家であるウラマーが一般信徒の質問に答えて出す法的見解、「ファトワー」を使って、イスラームにおけるジェンダー問題について研究しています。従来のジェンダー研究には一般に宗教を「家父長制を正当化するための道具」と見なし、宗教に批判的であるという傾向がありました。しかし、女性であることと宗教的であることとは矛盾するのでしょうか。ムスリムであることと、主体的で自立した女性であることとは両立不可能なのでしょうか。

私は女性と宗教に関する研究の重要な課題は、「宗教的であり、かつ女性であること」の意味を、つまりは脱宗教化や世俗化に向かわない、女性たちの主体性を理論化することだと考えています。

フィールドではできるだけ良い目と耳でありたい。そして宗教的で人間的でたくましい彼らの日常と、そこに息づくイスラーム——オリエンタリズムの向こう側の風景を、研究を通じて正確に伝えたい。そんな気持ちで日々、資料と向き合っています。